

## 1 中世貴族久我家とその家領

## 中世貴族久我家とその家領

國學院大學名譽教授 小川 信

司会・京都国立博物館 普及室長 下坂 守  
日時・四月二十七日〔土〕二二：三〇―一五：〇〇  
会場・京 都 国 立 博 物 館 講 堂

## 司 会

連休の最初の日に当たり、たいへん天気が宜しくて、みなさんわざわざお出でいただきまして誠にありがとうございました。本日は、只今新館のほうで四室を用いて行っております特別展観『中世の貴族』の関連講座として、國學院大學名譽教授小川信先生をお迎え致して「中世貴族久我家とその家領」というテーマで、お話をしてく戴くことになりました。みなさん、小川先生に就いてはご存じかと思いますが、簡単にご紹介をさせていただきます。

先生は大正九年、東京にお生まれになり、國學院大學をご卒業の後、國學院大學で教鞭をとっておられました。現在は、國學院を退職され、名誉教授をお勤めになっておられます。ご存じのように中世のご専門でございまして、たくさんご著書をお持ちでございまして、とりわけ、学術的な論文名で恐縮ですが、『足利一門守護発展史の研究』というたいへん大部な名著を刊行されてもおられます。中世を、特に中世の政治史を勉強している者では、先生の学恩を受けない者はないといってもよいかと思えます。

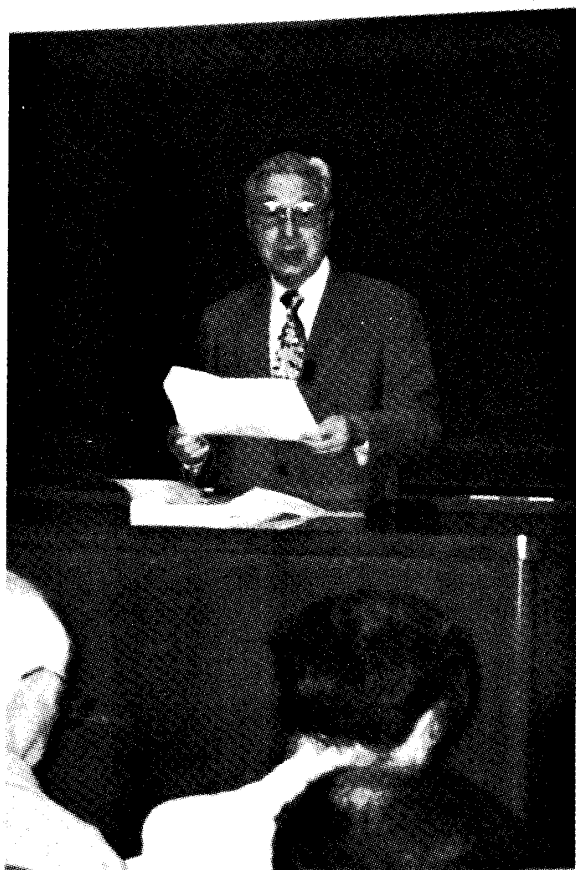
今回の展示、古文書の展示ということで博物館では、私が展示を担当させていただきましたけれども、銘打っておりますように、これは、久我家文書の修理が完成致したことを記念して開催致しております展示でございます。就きましては國學院大學にたいへんご協力をいただきました、その中でもとりわけ、小川先生からは、この展覧会図録を始めとして、展示に当たってはひとかたならぬご指導を受けました。文書名、それから作品解説、今回の展示、皆さんすでに御覧いただいたかと思いますが、一点、訓みが付いていますが、全部、小川先生のほうでお作り

いただきまして、たいへんなお仕事をお願いしたわけでございます。そういうことで、今回の特別展観『中世の貴族』に関しては、小川先生が一番良くその中身をお知りになっておられるといっても過言ではございません。今日の講演は、この展覧会を見るに当たっては、たいへん、参考になるかと思しますので、最後までどうぞゆっくりお聞きください。それでは小川先生宜しくお願い致します。

## 講演

### 一 中世貴族久我家の概要

只今ご紹介いただきました小川でございます。本日は、この博物館にお出でいただき、この展示でございます。これは、本館で催されておりますもう一つの展示のような、いろいろな「もの」の展示ではございませんので、たいへん地味ですけれども、しかし、古文書としては、指折り数えるようなものが多数出ておりますので、ごゆっくり御覧いただきたいと思います。



久我家の系譜を説く小川信名誉教授

展示の会場、新館の二階に無料配布のビラが用意されておりますので、これからお出でになる場合は、それを御覧くださいと、主な文書の説明がcai摘まんて書いてあります。また、今日のお話のために、三枚ほどレジュメを用意させていただきました。三枚目の後半のところに図がありますが、これは二階の四室を提供していただきました、その展示の何号文書と付けました、その数字でございます。この順序に御覧

## 3 中世貴族久我家とその家領

ならなくても宜しいのですけれども、これから何号文書というふうに申し上げますのは、展示室の第一室のどこにある、第二室のどこにある、ということがお判りになればと思います、この図を付けたわけでございます。

ところで、「中世貴族久我家とその家領」という題にいたしましたのですが、久我家というのはあまりご存じない方もあるかと思いますが、摂関家というものが、九条家、近衛家、それから鷹司、一条、二条という家柄、これを五摂家と申しまして、摂政、関白になられる家柄です。この摂関家の次ぎの家柄で、貴族としては、第二位といえますか、太政大臣まで昇進できる家柄というのが七つございまして、七清華といっており、そのうちの六家は藤原氏です。それは関院流、花山院流という二つの流派から出た家柄で、花山院家とか、或いは西園寺家とかいうふうなお家なのですが、その七清華の中で一つだけ源氏がありまして、これが久我家でございます。中院流なみのりんといって久我家のほかにも久世家だの東久世家だの、三条家、北畠家などという家に別れて発展致しますが、その一番嫡流の家が久我家です。

この久我家の古文書の一部を選んで展示致しましたけれども、これは実に平安末期から明治初年のものまで二千八百点以上ございまして、お公家さんの古文書でこれだけ点数が多いというのはそうはありません。

摂関家の九条家の文書がやはり数千点ありまして、江戸初期までのものが宮内庁から刊行されています。それから壬生家みぶという家がございます、小槻氏おづきという家です、それはいわば事務官僚の長のような家柄ですが、そのお宅にもやはり数千点の古文書をご所蔵でした。これも宮内庁から刊行されています。それらと匹敵するのがこの久我家文書です。七清華のほかのお家にも古文書があると思いますが、少なくとも世に知られている多数の文書としては、久我家文書だけでございます。

始めに書いておきましたように、久我家の明治初年のご当主であった建通卿たけみちという方は内大臣にまでなったお方ですが、この方が明治十五年に國學院の前身、皇典講究所が創立されたときに副総裁として、総裁の宮様をお助けして、亡くなる明治三十六年まで皇典講究所の運営に携わっておられました。その関係がありまして、そのお孫さんの常通侯の代になりました國學院大學にこの文書を預けようということになりました。それから戦後になりまして、正式に國學院大學図書館の所蔵ということになったわけです。そういう関係から、私も國學院大學がこれを所蔵しております。

只、六百年も五百年も経っている文書が多いものですから、痛んでいるものが少なくありません。国の重要文化財に指定されました機会に、国の補助と東京都の補助を受けまして、この京都の国立博物館の中にあります、日本中でも一番最高の修復専門のところで修復をしていただきました。

私も見学致しましたけれども、本当に、ピンセットで少しずらずらして裏打ちの紙を剥がして、さらに、昔の紙と同じような紙を漉いたのをその裏打ちに当てるという、これをなさるので結局、必要な文書九六〇点ばかり修繕ができました。修復する必要がなく保存が完全なもの、これは手が付いておりません。それから時代の新しいものまでは及んでいませんが、これで修復完了ということで、今回の展示になったわけです。

修復に満七年かかりました。そこで修復の出来上がりしました機会に、特に皆様にお目にかけるのに相応しいかと思われる文書を選びまして、今回、大きな番号で一〇〇点、枝番号を数えると一八四点、ほかに付として二点、これらを選びまして、去年の春から準備を始めまして、この四月から京都国立博物館の中で展示させていただくことになったわけです。

そこで久我家という家についても少し申し上げますと、これは一〇世紀の半ばの村上天皇、これは醍醐天皇と並ぶ名天子であるといわれます。「延喜・天曆の治」という、天曆の治の方の村上天皇ですね。その直後から、摂関政治の時代になりまして、藤原道長などが出てまいります、そのちよつと前です。その村上天皇の皇子に具平親王という方がおられる。そのまた皇子の師房という方が源氏を賜ります。村上源氏の初代になるわけです。

このころ代々の天皇の皇子が臣下になって姓を賜わるといって源氏を頂くわけです。桓武天皇の子孫は平氏ですけれども、そのあとはいいて源氏でございます。ですから村上源氏とか清和源氏とかいうふうに区別して、その村上源氏の嫡流の家がこの久我家でございます。

村上源氏というのは早くから幾つかに分かれますので、その中心の家が中院流なかのいんといわれております。始めはそれぞれ住んでいる屋敷などの名で呼んで、それで中院右大臣とか土御門内大臣とか申しました。師房の子で具平親王の孫に当ります俊房・顕房あきふさという兄弟、これが左大臣、右大臣として白河天皇をお助けして、白河天皇が院政を開いたときに、それを補佐した兄弟でしたが、その弟のほうの右大臣顕房という人から中院流という家が起るわけです。そして、この人は、六条に屋敷があつて、六条右大臣といわれていたのですが、その子の雅実という人が始めて源氏で太政大臣になりました、久我太政大臣と呼ばれます。久我というのは顕房・雅実父子が別荘を構えましたのが桂川の一番下流で、鴨川と合流しますところの西側、ここが久我で、今でも伏見区の久我というのですが、この久我の地に別荘を構えて、桂川から水を引いて景観を良くしたと見えまして、この御殿が「久我水閣」と呼ばれた、それが久我家の名前の起こりです。

この久我水閣の周りが、久我荘くがのしやうという荘園になりました、これが代々久我家の一番中心の荘園でございます。鎌倉時代の初め

## 5 中世貴族久我家とその家領

になりました土御門通親という内大臣がいますが、これは源頼朝と組んだ九条兼実と張り合ひまして、兼実をついに失脚させた辣腕家として知られております源通親、これが中院流の嫡流でございます。この土御門通親の嫡子の通光の頃から、久我家というふうには大体定着したと見て宜しいかと思われまゝ。有名な道元禪師も、通光の兄弟といわれています。こういう名門でして、二千八百点もある久我家文書の中には、非常に重要な政治・経済或いは文化に関わるような古文書をたくさん含んでおります。

実は私どもが國學院大學で作りました『中世の貴族』というこの展示のための図録には、全ての古文書を上下対称的に、上半分に文書の写真を載せまして、その下にその字の通り翻刻しました釈文しやくもんを載せまして、その次に少し小さい字で解説を書いております。

こちらの博物館でお骨折り戴きまして、その解説の要点と釈文全部を大部分の展示文書に載せて戴いております。ゆつくり御覧になればお判りになりますけども、現物と照らし合わせて御覧になるのはたいへんですから、もし出来れば、この『中世の貴族』という図録は、これは、宣伝を致しますと二千円で、全く実費でございます。ちょっと重いのですが、お買い求めになれば有難いと思います。その中に私が最初に全体の解説を「久我家文書と久我家領」という題で書いております。それからその次に、修復のことを、國學院大學図書館調査課長の磯貝さんが書いております。

これまでもこの久我家文書を使った論文などがたくさん出ておりまして、私の書きました概説の後ろに、これまでの久我家文書を大なり小なりお使いになって研究なさったものを並べておきましたが、七〇編以上あります。

ところでこの展覧には新館の四室を提供していただいて、展示しているわけですが、大きなテーマを二つ設けまして、最初の一室が第一テーマの「中世貴族の生活と文化」です。そのほかの三室には「中世貴族の経済」という題で、久我家に關係する経済的な事柄を、家領を中心として展示してあります。

## 二 第一テーマ 中世貴族の生活と文化

生活と文化の主なもののかい摘まんで申し上げますと、まず一号文書は「後伏見上皇宸筆伏見上皇御消息案」という長い題のものです。これは鎌倉の半ばから後、皇室が持明院統と太覚寺統の二つに分かれまして、両統が並立するという状態になった時期のものでございます。持明院統というのは、西の洞院大路の北の外れにあった持明院殿に由来し、現在、上京区の新町通寺の内付近だそうです。後深草天皇が持明院統の第一代であります。

一方、その弟の龜山天皇が大覚寺統の第一代ですね。大覚寺というのは、もちろん、皆さんよくご存じの嵯峨の大覚寺、あそ

ここに代々上皇になられると、住んでおられたことから大覚寺統といひます。前に流行<sup>はや</sup>りました流行歌で、「京都大原三千院」などというのはいいですけども、「京都嵐山<sup>らんざん</sup>大覚寺」というのはどうも、やはり「嵯峨の大覚寺」といつてもらいたかったですね。本当によいお寺でございます。そこに、代々居られたのが大覚寺統の天皇で、上皇になられるとそこにお住みになるということでした。持明院の方は、惜しいかな今は跡が残っておりませんが、只今申しましたように、新町通のあたりにあったわけでした。その持明院統の第二代が伏見天皇で、上皇になられて、そのお子様の後伏見天皇に皇位を継がせたのですけれど、大覚寺統の方から、そろそろ、こちらに皇位をよこすようにということで、大覚寺統の後二条天皇が皇位につかれる。そこで後伏見天皇は、若くして上皇になったわけです。それでまだ皇子が生まれておられないので、御父伏見上皇は心配して後伏見上皇に手紙を書かれた、これが今回展示の一号文書です。「春宮御事<sup>とうぐうご</sup>」という言葉で始まっております。

その内容は、まだ皇子が誕生しておられないから猶子<sup>ゆうし</sup>、養子のようなものです。猶子を定めて春宮つまり皇太子になさるよ  
うに、ということをして伏見上皇は御子の後伏見上皇への手紙に書いておられるわけですね。それを後伏見上皇がそのまま写された  
のが、現在、久我家に伝わっております。或いは久我家の当主久我通基は、この事について相談を受けられたのかも知れません。  
その記録は残っておりませんが、久我家にこの後伏見上皇が写された伏見上皇の手紙が残っているわけですからね。さて、  
この提案を容れられまして後伏見上皇は弟の富仁王を猶子にして親王とし、後二条天皇の皇太子となされた。そして数年後に後  
二条天皇が亡くなられて、富仁親王が花園天皇となります。こういうようにして、持明院統からすればたいへん大事な皇位継承  
の問題を、恐らく久我家に相談されたのではないかというものがこの文書でございます。

そのほか、二号文書は、それより少し時代が下る後醍醐天皇の頃の太政大臣を勤めた前太政大臣久我長通<sup>とういん</sup>が洞院<sup>とういん</sup>、これも清華  
家の西園寺家の一門ですが、その洞院公賢<sup>きんかた</sup>が太政大臣になったのを祝した手紙です。たいそう立派な字でありまして、「御慶賀事<sup>ごけいがじ</sup>」  
と言う書き出しであります。

それからもつと注目すべきものは、北畠親房の自筆書状で、これを三号文書として展示しておきました。親房はご承知のとおり  
南朝の中心人物として知られております。久我家の分家の三条家、それから更に分れたのが北畠家でございます。代々、大  
納言或いは権大納言になるといふ、今日で言えば、閣僚級の家柄であります。けれども大臣になるというほどの家ではなかった。  
しかし、後醍醐天皇は、この親房の優秀な人柄を見込んで拔擢され、側近として取り立てて、天皇親政に参画させるということ  
で、北畠親房は活動致します。この親房の自筆書状は痛んでおりまして、前から仮の修理はしてあったのですけれども、それこ

## 7 中世貴族久我家とその家領

そ今回、修復がたいへんであったと思われます。これはどうしてこう痛んだかというと、ほかにも痛んだ古文書があります。応仁の乱などの戦乱、そのほかにも京都ではずいぶん火事がございますので、そういう火災に遭った文書のようにございます。下の端が焼けておりまして、上には欠けた跡がございます。そういう文書ですが大部分の字が幸い読めます。

入道して覚空と号しておった北畠親房が、宛名がありませんけれども、久我家の当主長通の側近に宛てたものと思われます。というのは、中身は「彼敷地事」という文言に始まるのですが、京都の中の、あの敷地について私がお願いしたらば、それを譲ることを許してくださいとお願いいたします。もし本望を達したら単なる私利私欲のためでなく、祖先顕彰のために尽くしたいと思っています、と書いてあるわけですね。そういった南朝の親房の文書が何故こういうふうに残っているかということになりますと、これは恐らく二・三回南北朝が合一しようという動きがあった、その一つに関係があると思われます。

私が考えますに、南朝年号で正平の六年（一三五）か七年なのですが、七年というのは有名な正平一統と申しまして、南朝年号の正平で天下が統一したという、少なくとも京都周辺は南朝年号だけをを用いるようになった年であります。これは足利尊氏が弟の直義を倒すために正平六年十月に南朝と急遽和睦をしまして、後村上天皇を京都にお迎え申し上げ、北朝の天子は止めますということを申し出て、それで後村上天皇はまさに京都にはいろうとして石清水まで来られたのですね、そして北畠親房は京都にはいます。しかしこの正平一統は、翌七年二月には破れます。一方、親房の書状は日付が四月二十五日なのです、そうすると合わないわけです。ですから正平七年の十一月から八年の二月までは、南朝中心の天下一統という話が纏まっていたのですが、しかし、足利方と、もう一回戦いが始まりますので四月までは正平一統は持ちませんでした。それではこの親房の書状は何時なんだろうと考えますと、その前の正平五年から実は足利方に強烈な内紛が起りまして、足利直義が兄の將軍尊氏と戦争状態になったわけなのです。一家一族で互いに戦うという状況の中で直義は、後村上天皇に和平の話を持ち掛ける。それで使者が吉野と往ったり来たりしましてね、そういうことが判っております。それが結局正平六年の四月一杯くらいまでかかって纏まりました、そして五月にはもう、崩れてしまう。ですから多分この四月というのは正平一統の前年の正平六年であろうと思われます。こういうわけで北畠親房は京都にはいろう、そして京都の政治をとろうということ、昔の邸の敷地を返してほしいというように恐らく申し出たのだと思います。その敷地は恐らく久我家が管理していたのでしょう。それを交渉が纏まって返して戴いてどうも有難うと、こういう文書でございます。ですから南北朝の合一の一端を現わします。完全な合一ではありませんで破れますけれども、その間に久我家がやはり一つの役割を果たしていたということが判る文書でございます。その他にも、久我家が朝

延でいろいろ大事な役割を演じていたということが判るものがありますが、例えば、次の頁にありますように久我豊通の書状、これは年代が下りまして応仁の乱の後になります。明応八年という年ですが、六号文書ですね。これは、時の当主の久我豊通が、一門の六条有国という人の官位を推薦するというものでありまして、官位の推薦というのは、氏の長者うぢが出来るわけですね、氏の長者というのは、藤原氏にも、ほかの氏にもあるわけですから、この場合は源氏の長者です。源氏一門に対する大きな権限を持っておりまして、もし一門の名誉を汚すような者が現われたならば、その氏から追放する、放氏ほうしといって氏から放つということもできる、それから逆に、官位を天皇に申し上げて昇進させるということもするわけで、この場合は村上源氏一門の六条有国という人の官位を推薦しておりますので、これは久我家当主の源氏の長者としての活動を表わすものであります。

その他、「貞治五年元日節会記」(四号文書(一))というのがございます。ずいぶん、長い巻物になっておりますけれども、事細かに元日の朝廷の儀式を書いております。どういうふうな筋を取って、どのように拝礼をするとかということなどをいろいろと書いておりますが、これはその時の当主の久我具通という人が権大納言に昇進した、その拝賀の礼をするという一番晴れがましい儀式の時に、自らこれを記録したものです。

その当時の朝廷というのは、儀式が非常に詳しくて、それを間違ってもしたらいへんな恥になるわけですから、よく練習して式に臨むわけでありますが、この時の記録はそのまま残っているものではありません。後に文明十四年(一四八二)というのは、応仁の乱の後ですが、時の太政大臣の久我博通という数代後の当主が、子息の豊通にこれを書き写させたものです。一番お終いに博通自身が、祖先の具通公の書いた記録を人が書き写したのが出てきた。なにしろ父祖の三つの節会記は、今度の乱、というのは応仁の乱で、焼失してしまっている。だからこれは天が授けた貴重なものだといって、奥書を書いております。

確かにたくさん文書が、今までよくまあ二千八百点も残ったものだと思います。この応仁の乱前のものもずいぶん残っておりますが、それらをいかにして久我家が大事に所蔵しようとして苦労されたかということが判ります。残念ながら中世の公家の文書というものは、そうたくさんは残っておりません。というのはやはりこういう応仁の乱とか、その他の戦乱や或いは火災等に会いました。ずいぶん焼け失せてしまふ、紛失してしまふという事が多かったためですが、幸いに九条家文書と並んで久我家文書が残ったのは、代々の当主及び家来たちが一所懸命になって、文書を護るということをしたために違いなわけですね。

それから第一室の右側にずうっと長い巻物になっている二十八通の文書が展覧されています。それからこちらに十五通の巻物があります。この二つの巻物は、それぞれ「久我家重書」、つまり重要書類という名前になっています。これも綺麗に修復して展

## 9 中世貴族久我家とその家領

示されていますけれども、一つは、主に後醍醐天皇以下、後村上、後光厳、後花園といった各天皇の綸旨<sup>りんじ</sup>です。綸旨<sup>りんじ</sup>というのは、天皇の仰せをお側に仕えている蔵人<sup>くらうど</sup>が書き写して発布するもの、それを綸旨と申します。普通の武将などのものを側近のものが書き写したものは、奉書といえますね。奉じて出したものということですね。天皇の場合は、これを綸旨といえます。よく「薄墨の綸旨」といって薄墨色をしております。朝廷の中で、当時は紙が貴重であったから、ということから始まったのです。朝廷の下に紙屋院<sup>かみやりん</sup>という施設がありまして、反古紙<sup>ぼこ</sup>、いらなくなった紙を漉き返して作るのです。漂白技術などというものはない時代ですから、薄墨色になってその紙が出来上がるわけです。当時の再生紙ですね。紙屋院のところから流れてくる川を紙屋川といって、現在も名前が残っている。朝廷のもとで、そういう紙漉きの施設があって、漉き返した宿紙<sup>しゅくし</sup>という薄墨色の紙を、かえって綸旨というような大事な文書に使う習慣ができて、そのために、民間ではこういうものを使つてはいけないわけですね。この綸旨がたくさんございます。第一室の正面に並んでおります「重書」が、大部分綸旨でございます。中には、上皇の院宣もはいっております。特に後醍醐天皇の綸旨は六通ありまして、これは、後醍醐天皇と、時の久我家の当主久我長通とはたいへん関係が深かったということが判ります。後からまた、それに関連したことをちよつと申し上げましょう。

そのほかに文化関係としましては、前に申し上げました伏見天皇が和歌が堪能でいらつしやうて、いろいろ歌を書かれた自筆の草稿のようなものが残っております。その一部が久我家にはいつておりまして、これはやはりたいへん貴重なものです。今回の重要文化財は文書中心ということで、したがってそれからは外れていますが、かつて重要美術品になったものであります。その重要美術品の伏見天皇の御和歌集、これは付一号として出しております。これは注目すべきもので、「広沢切<sup>ひろさわぎり</sup>」と呼ばれています。それからまた、桃山時代に下りますけれども、里村紹巴<sup>じようは</sup>という連歌師、そのほか昌叱<sup>しょうしつ</sup>、昌琢、それから何という名字か分かりませんが、紹之<sup>じようし</sup>など数名の連歌師の消息も出しておきました。

里村紹巴の書状の一通は注目すべきものでありまして、一〇号文書ですけども、豊臣秀吉、今テレビでやっておりますが、あの秀吉が、もう功成り名を遂げて、しかも朝鮮出兵をしたりして、そしてすっかり思い上がつてしまふ、その時期でありまして、甥の秀次を関白にして、天下を相続させるつもりであった。ところがご承知のように実子の秀頼が生まれたものですから、秀次を疎んじましてね。秀次という人は文学をたしなんだ人なんです、これを結局処刑してしまします。

秀次にたいへん気に入られていた里村紹巴という連歌師は、おまえも謀叛に関連していただろうと、秀吉から謹慎を命ぜられます。三井寺のすぐ側に家を借りて、そこにひっそりと住んだらしゅうございます。そこで「三井辺より」と書いた、久我家の

当主敦通に宛てたと思われる書状がありまして、この窮況を哀れんで下さって、米を一石贈って戴いたのはたいへん有難い、石田三成も目をかけてくれていますというように書いて、京都に帰れたら感謝のために伺いたいということが述べてある。そういった当時の政治情勢に関連するものが残っております。ほかにももちろん久我家と文学に関連するものはあるわけですが、今回は、いま申したようなものを主に展示致しました。

### 三 第二テーマ 中世貴族の経済

それから、第二テーマ。これは「貴族の経済」と名付けましたのは、大体中世の貴族は自分の家領けりょうというものを自分で確保し、維持し、或いは発展させるということが必要なのです。近世の貴族ですと、將軍家から何百石、何千石という家領を与えられて、これを幕府側の代官が管理して、お米を送ってもらうというだけに過ぎなくなるのですけれども、平安から室町時代頃の貴族はそうではありません。また、奈良時代などの律令制の時代の貴族は、太政大臣、左大臣などというその官職、それから正一位とか正三位というその位、つまり官位に応じてそれぞれ一定の土地や俸禄を貰います。それで生活するわけでありまして。けれども、平安時代になりますとそういうことが衰えてきまして、貴族は自分で自分の家産を維持しなければならない、経営しなければならぬ。

幸い、高い地位の貴族になりますと、地方の豪族がその貴族の保護を受けて、自分の身を護り、自分の財産を護ろうというもくろみがあるものですから、それで、寄進と当時いつていましたが、莊園を寄付してくれます。そこで勢いのある、或いは地位の高い貴族はぜひぶんとくさんの莊園を獲得したわけです。ただしもちろん、それに値することを、上からしなければならぬのです。それを頭に置いて御覧いただきたいのが、十六号文書でございまして、「中院家領目録草案」というのですが、七十一ヶ所ばかり、陸奥から肥後まで二十八ヶ国に分散している莊園が記載されております。もとの目録は平安時代後期の源雅定の時代と推定されるわけですが、その頃、十二世紀の半ば、まだ鎌倉幕府ができるよりも四十年前にはですね、中院流の村上源氏はたくさん所の領を持っておったはず。そのことが伝わっている文書目録であります。

ところが、それが鎌倉時代になるとガッと減少します。減少する原因の一つは、分割相続と申しまして、十人子供がいれば十人に財産を分けなければならない、女子にも財産を与える、そうすると男でも分家して独立する。女子ですと他の家に嫁に行くことが多い。そうしますと財産を持って嫁にいくことになりますね、ほかの公家の家領になってしまいうわけです。であります

から領地が減少していく、見る見る減少していくということが一つございます。そういうことがありますので、今度は一族の中で取り合いが始まります。これはまあ人間として、どうしても自分が確保したい、いや私が父から譲られたのだ、というふうな争いが起こるわけでありまして、それが判りますのは一七号という一連の文書ですが、これを見ますと、まず、鎌倉時代の半ばくらいになりますと、先ほど申しました久我通光という久我家の当主は、後妻の三条という、これはご主人が亡くなって尼西蓮となる人ですが、この後妻に全財産を譲って、亡くなったのですね。そのために三条の子でない子供達は困ってしまうわけですが、三条は自分の生んだ子供が可愛いわけですから、そうでない子には家領を譲るまいとするわけですね。私は主人から全財産を預かったのだ、だれに譲ろうが勝手ということで、それで訴訟が起きました。嫡子の通忠は三条の実子でないものですから、土地を全く譲って貰えないということで訴訟を起こして、やっと当時の後嵯峨上皇の院宣で、久我荘は通忠に譲りなさい、そのほかの荘園は全部西蓮が処分して宜しいと、こんな判決が出ているんですね。ですからこれはたいへんなことでして、通忠以降の久我家は久我荘しか持っていないということになってしまいうわけですね。では家領が何処へいつてしまったかといいますと、三条が保護を期待した西園寺家の家領に一部が渡っております。そういうことが判るのが、この一七号文書であります。

一方、池大納言頼盛<sup>いけの</sup>という人がおります。これは久我家とは直接関係無いのですけれども、平氏が没落して都落ちしますね。しかし、平清盛の弟の頼盛という人は、母親が池禪尼です。これは平忠盛の後妻でありまして、源頼朝の父義朝が平治の乱を起こして、義朝は戦死して頼朝は十三歳で捕ま<sup>つか</sup>ってしまいます。清盛の面前に引き出された時に、池禪尼が、可哀そうだから死刑にしないでと言ってくれたお陰で頼朝は命拾いしたのですね。そのために頼朝は池禪尼にたいへん感謝したのですが、平家が没落した時に、池禪尼の実子で清盛の異母弟の頼盛だけは、鎌倉にお出でなさいと鎌倉に呼び寄せまして、あなたの財産は全部そっくり認めます。これを安堵といえますね。新しく土地を与えるとか寄進するとかというのではなく、安堵というのは現在ある権利を、ある権力者が認めたということです。それで頼朝は、亡き池禪尼の恩に感謝しまして、池禪尼の実子である頼盛に、頼盛の領地が三十四ヶ所ほどある、それを全部安堵するということにしたわけがあります。

そこで、頼盛の嫡子が光盛といまして、鎌倉時代になりました。この光盛が七名の女子に領地を分けます。もう、光盛自身のとときには三十四ヶ所は無く、その半分くらいであります。それを光盛は娘たちに分けております。その一人、安嘉門院宣旨局<sup>せんのつぼね</sup>という人はその自分が父光盛から譲られた、数ヶ所の荘園を、妹と思われま<sup>ま</sup>す久我通忠の妻に譲ります。そのほかにも三条局というその姉妹も通忠の妻に領地を譲ります。通忠の亡くなった後ですが、その妻が譲られて嫡子通基に譲りますので、全部で七

つの莊園が池大納言家領から久我家にはいることになります。その経緯がはっきり判ります。つまり一方では根本家領こんぽんと申しました久我家先祖代々の家領がほんとうに少なくなってしまうた。その代わり今度は、池大納言家領がはいってくるといふ変化が鎌倉時代に起こったことがはっきり判ります。これが一八号文書という一連の巻物でございます。

そういうふうに分家の財産の譲状というものは、たいへん大事なものですから、大切に保存したわけです。何かあると領地の証拠というものをさなければいけないわけですから、その証拠書類を一所懸命遺したものなのですね。

ところが鎌倉時代の末、通基の子の久我通雄の代になりまして、二人の息子がおります、嫡子が先程も話のしました長通、もう一人が通定という弟ですが、通雄は、晩年に生まれた通定が可愛くてしょうがないので、長男の長通を勘当しまして財産を譲らないで、全部通定に譲るといふことをしてしまつたわけです。この兄弟は三十歳くらい年が違ふんですね。それで父通雄が亡くなりました時、長通は後醍醐天皇に訴えます。後醍醐天皇はまだ鎌倉幕府を倒す前でありましたが、その訴えを聞き入れて、これは不当である、特に先程申しました池大納言家領、これはそっくり通定に行つてしまつたが、これは通定が鎌倉幕府から安堵してもらっているけれど、これを取り戻すようにという論旨が下ります。その論旨も陳列してあります。

そこで長通は、鎌倉幕府にも運動をして、土地を取り返しております。鎌倉幕府の倒れる寸前のような時期ですけども、久我長通は、自分の家領を取り返しました。長通はこの家領の返還確保ということです。いぶん苦労したわけで、このほかにも、もとの根本家領もだいぶ取り戻します。

そこで長通は自分の嫡子通相に全財産を譲るといふ譲状の長いのを書かせて、特に終りの方の言葉は、自筆で書いて、一つの莊園も残らず皆、通相に譲つて、ほかの子供達は通相から配分してもらつて、一代限り領地にするようにと決めています。分割相続はここで止めて、嫡子だけの相続、つまり嫡子単独相続に切り替えたということがはっきり判ります。

これが南北朝時代の初め頃であります、譲状を書いた家領が、それからずっと伝わるかというところ、これがたいへんでして、南北朝の内乱も続きます、それが終わつてもいろいろ乱があったり、さらに、応仁の乱になるというふうなことがあつて、ますます武士が台頭します。中には現地の武士が侵略して、自分のものだと言い張る。そうでなくても、時の守護とか、その土地の地頭というような人々が代官にして下さい、といって代官になつて、請所うけどころと申しまして、莊園の管理を請け負います。請け負つたが最後、年貢は少ししか寄越さないとか、全然寄越さないとか、いうように段々なつてしまふのです。それに関する訴訟文書がたくさん残っております。久我家当主及び家臣達は苦労して、天皇に申し上げたり、室町幕府に訴えたりしました。これは

## 13 中世貴族久我家とその家領

証拠書類があるのですから、朝廷でも幕府でも、それは当然安堵し、不法な者は排除せよという命令を出してくれるのですね。くれるのですけれども、それはなかなか実行力を伴わない。非常に苦勞して相手と交渉して年貢を送ってもらうように頼むとか、或いは代官になった者の主君に頼んで、これは不当であるから処罰してくださいと頼むとか、いろいろやっています。

例えば、非常に由緒のある、尾張の一宮——今は市の名前になって一宮市という——真清田神社という大きなお宮がございす。この真清田社とその社領がそっくり頼盛領だったのが久我家に入った家領の一つですが、これは、なかなか代官が年貢を送ってこないというような状態になったことが判りまして、とうとう応仁の乱の最中くらいから、ぷつぷつ切れてしまします。こういう莊園もあります。

しかしですね、もちろん京都では久我莊とその周辺だけは、久我家は確保することができました。これは直接自分の家来を代官にしたり、莊園は名田みよでんという区分に別れております、その名田の主、名主みょうしゅに任命したりして、久我家の家来たちに土地を管理させるということをやって、年貢がはいってくるようにしている。その人達は恩義を感じましてね。鎮守のお宮、上久我大明神というお宮の管理を御本所ごほんじょ様の久我家と相談して、自分たちで管理しましょうという、そういう請約書が久我家に提出されている。久我家は自分の家領の中心の久我莊などは、直接管理ができたわけですね、そして、織田信長の時に至ります。展示してございす「天下布武」という有名な印をつけてある信長の朱印状、これは久我など五ヶ村及び散在した領地を安堵するものでありまして、こうやって久我家は京都近郊の領地は確保できました。

ところが由緒正しい領地であっても、例えば、真清田社の社領のように途中で失われていくという領地もたくさんあったわけです。その中で代官請にして、現地の人を代官にしながら維持したものがあります。その一つは、伊勢の木造莊こづくりのしょうという莊園、これは北畠氏がその周辺を領有していましたので、北畠の家臣などを代官として維持していた。それが戦国時代になるとほとんど年貢を送って寄越さないということになって、久我家から苦情を言いましたね、北畠氏は、それではちゃんと送るように代官に言い付けますと返事をした文書が展示してございす、その手紙には北畠の一族の寄越した手紙も付いておりまして、それには、北畠の一族に対して官位を与えて中將に任命するように骨を折っていたいて有難う、ついては、年貢をちゃんと送りますというような Give and take ができておりまして、なんとか戦国時代の末まで領地を確保できたわけです。

北畠家と違いました明確ではないのですけれども、久我の一門だという伝承を持っております赤松という播磨の大名がおります、この赤松氏も、自分は村上源氏から出た一族であると威張っているわけでありすから、その国内の久我家の領地の年貢を、

少々なり寄越しているわけですね。そうやって久我家の一門である北畠氏、それから一門であると言っている赤松氏からなんとか年貢がはいったんですね。しかし国々にある領地がだんだん減っていききます、これは収益がずっと減少するわけですから、一大事です。それで久我家は天皇に申し上げたり、幕府に運動したりしたんですね。そこで関所の収益が一部認められます。

それから京都の町の中に、立売<sup>たちうり</sup>という、地名が今でも残っておりますね。上立売、中立売、下立売、というのは、あれは店を構えないで市場として、商人が立って売ったことから起こるそうです。その立売の儲けの一部を久我家に入れるということが承認されています。これも展示してございます。その承認には、繪旨と、それから室町幕府の奉行人奉書という、幕府の奉行達を書いて久我家に渡したものがあります。関所と申しましたのは、主に京都の七口<sup>ななぐち</sup>の関所ですね、鞍馬口だの、栗田口だの、大原口、長坂口、丹波口、鳥羽口、東寺口などといった入口、この七口を通る商人の中から収める特定の商品だけが久我家の収益になる。特定商品の通関税ですね。

それは櫛、それから皮籠<sup>かわご</sup>というのは、弁当箱のような、皮でくるんだ籠ですね、それと鍬<sup>やじり</sup>、すり鉢。この四種類だけが久我家の収入になる。ところがなかなか払ってくれないので、商人中に、ちゃんと払うようにと指図したり、それから皮籠の課税がなかなかはいらないから、二人の座頭<sup>ざがしら</sup>を命じて、ちゃんと管理して払うようにさせるとか、そういうことを幕府からやっております。ということは、その収入も容易ではなかった。なにしろ、一揆が起ったり、戦乱がしょっちゅう起こっているという戦国時代です。細川氏が二派に別れて争い、そのうちに三好長慶<sup>ながよし</sup>が出て京都を占領するなどという騒ぎが起こっている最中です。そういう戦乱の中でも、なんとか税を徴収するのに苦労しておりますが、もちろん、税を払おうなどという商人は減多にいないと見えまして、従って立ち消えになります。

そしてもう一つ注目すべきものは、盲人の座です。目の不自由な人達はどうやって生活を立てるかという、その当時流行したのは平家琵琶で、平曲と申しますね。琵琶を担いで歩いて平家物語を語って、門付けをしたりして収入にする。この人達が座を作っております。後には按摩さんとか、三味線を弾く人々もはいるのですけれども、室町時代までは大体、平家琵琶だったようです。この平家琵琶を奏する盲人たちの組合を当道座<sup>とうどうざ</sup>といいます。久我家ではこの人達の収益を昔から久我家が管領しているんだと言いましてね、そこから札銭を取ろうとしたのですが、結局、それでもいいというのより、それは反対だという方が多くてですね。当道座が二派に別れて争ったのですけども、結局、久我家につかないものが主流を占めてしましまして、久我家のそういう試みは成功しませんでした。それでも天皇から繪旨を戴いたり、幕府から当道座は久我家が管理することを認める、

それに背くものは成敗せよなどというような奉書まで貰っているのですが、うまくいきませんでした。

ところが江戸時代になりますと、久我広通という人が出ました。その前に先ほど申しました信長から近郊の領地を安堵される。それから久我村、上・下久我荘だけは安堵するという、もうじき豊臣になる羽柴秀吉の承認する権利書、判物はんもつと言いますが、これも出ておるわけですね、これも展示してございます。ところが、次の徳川家康にはさっぱり久我家の領地が認めて貰えない。連歌をたいへん愛好した久我敦通という人が、事件を起こしまして、時の後陽成天皇からお咎めを受けて追放されるわけです。それですから領地は無しになってしまいました。家康はさっぱり領地をくれなかった。やっと運動して、二〇〇石だけくれました。久我荘だけでも一二三〇石あったのです。ところが、それが二〇〇石ではね。またその頃は、権中納言まで地位が下がってしまいました。

それもあるて久我家は苦境に立ちます。第一回目は鎌倉時代に苦境に立ったわけですが、今度は二回目の苦境ですね。第一回目の苦境のときに大いに運動して盛り返したのが、久我長通という当主でした。今度は、久我広通という当主が江戸初期に出まして、この人がたいへん幕府に運動して、領地をさらに五〇〇石加増して貰って、徳川家綱・綱吉の時には、七〇〇石の家領にまで回復したわけです。そしてまた太政大臣にはなれませんでしたけれども、右大臣とか、内大臣とか、大臣の地位にもう一回返り咲いた。それと同時に今申しました当道座の管理権を主張致しまして、結局、十年掛かって幕府がやっと認めてくれました。当時の盲人は一定の資格を取るために、お金を当道座の役所に収めるわけです。そこで上級の盲人達は、相当な収入がある。久我広通は、その一部を階級が上がる時に久我家に収めるようにということを当道座の管領と称して主張したわけです。それには昔の古文書が役に立ちましてね。それでは久我家に管領を認めるという江戸幕府の裁定が下ります。七〇〇石の領地と、さらに当道座からの礼銀が上がることで久我家は一息ついたというのが、江戸初期の久我家でございます。江戸時代まで話がいりましてので、これで終わらせていただきますが、あと三、四分ありますので、もしご質問などありましたら、どうぞおっしゃってください。

「小袖屋こわぎやというのと小割座こわりざについて伺います」

これはどちらも京都の市中で営業しております。小割こわりというのは字引を見ますと、材木を小さく切ったものの、薪たきぎにしたり、屋根を葺くのにも用いたといわれます。小袖は今の着物ですね。和服ですが、平安時代には下着だったんです。けれども、後には

上着になりましてね、大きな袖でなくて、割りに小さい袖というので、小袖という。平常服を小袖と言います。それを売るのですから、呉服屋さんですね。ずいぶん繁盛したと思います。それと小割座は薪屋さんの組合ですかね、それらからの課税が久我家の収入になったということでございます。

「『讃岐典侍日記』に興味を感じていまして、源雅実まさざねのことが知りたいんですけれども、どのような資料に当たったらいいのか、教えていただけませんかしょうか」

雅実の時代といえますのは、平安後期で、『大日本史料』にその辺はかなり出ておりますから、それでお調べになるといいと思います。確かに雅実という人は、源氏で太政大臣に初めてなった人でして、権勢があつたわけですから、当時のいろいろな公家の日記類などに関係の記事が出てくる筈ですので、そういうものもいかがでしょうか。

「荘園の所有関係というんですか、領家職とか、預所職とかいろんなものがありますね、久我家の家領の場合どんな形でしょうか」

大体、公家はその家領として持っている権利は、本家、領家、預所あずか所、この三つが主でございますが、久我家の場合は、領家が多いですね。本家は、皇室、例えば、八条院などです。八条院というのは、鳥羽上皇の愛娘で、鳥羽法皇夫妻から可愛がられて、全国にたくさん荘園の、本家職しよというものを与えられているわけです。それでその役所の八条院庁では、真清田社の預所職に平頼盛の奥さんを任命したわけです。預所、これは本家や領家の下において、その荘園を管理するという意味なのですけれども、久我家にはそれもあつたのです。しかし主に領家職を久我家は持っていたのが普通です。九条家の場合ですと、さすがに摂関家ですから、皇室と張合うくらいに領地が多くて、本家職が多いですね。つまり、領家という貴族がいて、さらに本家に寄進する、それが皇室や九条家のような摂関家の場合です。久我家の場合は、一つ下の領家職が主であつたようにございます。なお一部、地頭職もあります。後醍醐天皇の場合には、武士が持っていた地頭職を、久我家のような貴族に与えるというのが一つの政策だつたんです。領家職と地頭職を両方持つていれば強いわけですからね。